



## 文人が愛したまちを たどる旅

# 文人が愛したまちをたどる旅

港区には小説家や歌人ゆかりの地が数多く残されています。

小説家では「紅露時代」を築いた明治期の文豪尾崎紅葉生誕の地（→59ページ）、長編小説『夜明け前』の執筆した島崎藤村の旧宅跡（→59ページ）、白樺派を代表する小説家志賀直哉の居住の跡（→57ページ）、江戸文芸をこよなく愛した永井荷風の旧居「偏奇館」跡（→58ページ）、児童文学の創始者巖谷小波宅跡（→61ページ）、エッセイ『どくとるマンボウ青春記』などで著名な北杜夫生誕の地（→57ページ）など、多彩な文人たちが生まれ、育ち、そして執筆活動に打ち込みました。この中には『芝肴』『男心は増上寺』など出身地である芝を終生大事にした尾崎紅葉や、『飯倉附近』で大正時代から昭和初期にかけての飯倉町の様子を綴った島崎藤村など、港区を舞台にした作品を発表した文人も少なくありません。

歌人ではアララギ派の代表的な歌人齋藤茂吉居住の跡（→56ページ）や、芸術家岡本太郎の母親としても有名な歌人岡本かの子生誕の地（→56ページ）、俳人

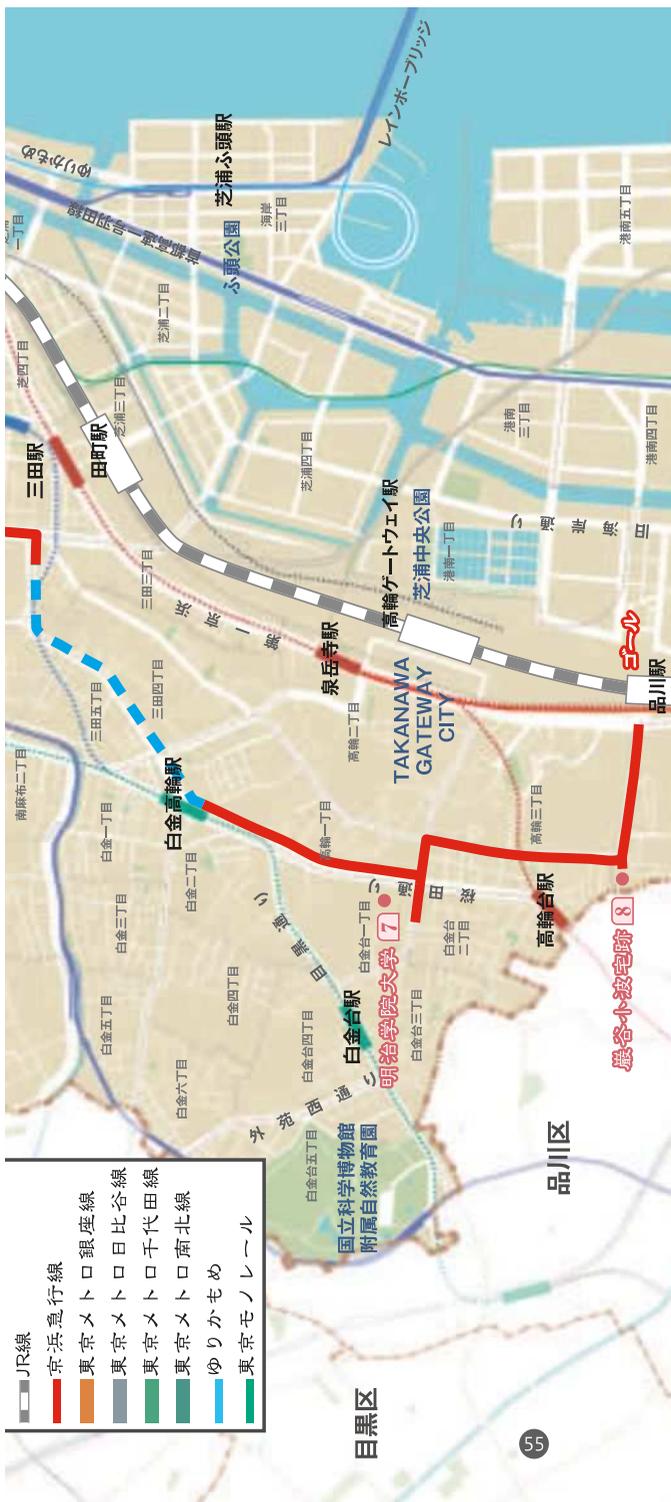
久保田万太郎終焉の地（→58ページ）などのゆかりの地があります。

これらの文人を育て、また彼らの活動の拠点ともなった教育機関として、慶應義塾大学（→60ページ）と明治学院大学（→61ページ）があります。慶應義塾大学は福澤諭吉が創立した日本の代表的な私立大学ですが、耽美派やシュルレアリスムの作家・詩人を多数輩出した三田文学の総本山でもあります。また、明治学院大学は日本で最も古い歴史をもつキリスト教主義学校（ミッションスクール）で、小説家島崎藤村の学舎でもあります。藤村の作品には同校の気風が大きく影響を与えたといわれています。

さらに短期間ではありますが、港区内に住んだ文人として、徳富蘇峰、水上瀧太郎、樋口一葉、北村透谷、国木田独歩、二葉亭四迷、大佛次郎、北原白秋、菊池寛、岡本綺堂、高見順、吉川英治、太宰治、江戸川乱歩などがいます。

このように多くの文人たちに愛された街並を彼らの作品とあわせてゆっくり巡ってはいかがでしょう。





# コースルート・所要時間

スタート	ゴール	所要時間	交通機関
表参道駅	JR品川駅	徒歩 15分	徒歩
1 富士宮駅 居住の跡	JR品川駅	徒歩 15分	徒歩
2 高円寺駅 居住の跡	JR品川駅	徒歩 15分	徒歩
3 永井町駅 旧高円寺駅跡	JR品川駅	徒歩 10分	徒歩
4 島崎町 村田宅跡	JR品川駅	徒歩 10分	徒歩
5 尾崎紅葉生誕の地跡	JR品川駅	徒歩 5分	徒歩
6 慶應義塾大学	JR品川駅	徒歩 25分	徒歩
7 明治学院大学	JR品川駅	徒歩 10分	徒歩
8 巖谷小波宅跡	JR品川駅	徒歩 15分	徒歩
ゴール	JR品川駅	徒歩 10分	徒歩

スタート	ゴール	所要時間	交通機関
表参道駅	品川駅	徒歩 30分	徒歩
1 富士宮駅 居住の跡	品川駅	徒歩 15分	徒歩
2 高円寺駅 居住の跡	品川駅	徒歩 15分	徒歩
3 永井町駅 旧高円寺駅跡	品川駅	徒歩 10分	徒歩
4 島崎町 村田宅跡	品川駅	徒歩 10分	徒歩
5 尾崎紅葉生誕の地跡	品川駅	徒歩 5分	徒歩
6 慶應義塾大学	品川駅	徒歩 25分	徒歩
7 明治学院大学	品川駅	徒歩 10分	徒歩
8 巖谷小波宅跡	品川駅	徒歩 15分	徒歩
ゴール	品川駅	徒歩 10分	徒歩

## 岡本かの子生誕の地跡

所 南青山2-25

ここは歌人・小説家岡本かの子（1889～1939）が誕生したところです。明治22年（1889）3月1日に豪商大貫家の娘として青山南町3丁目22番地の別邸で生まれました。かの子は体が弱かったため、明治25年（1892）に両親の手許を離れ、二子（現川崎市高津区）にある大貫家の本邸で養育母に育てられました。16歳ごろから歌を雑誌に投稿しはじめ、与謝野晶子を訪ねて新詩社の同人となり、『明星』や『スバル』で新体詩や和歌を発表するようになります。明治43年（1910）に漫画家の岡本一平と結婚し、翌年後に芸術家となる太郎を出産し、青山北町六丁目（現北青山三丁目）に転居します。以降、白金、青山南町などに住まいを移し、昭和14年（1939）2月18日に青山高樹町三番地（現南青山六丁目6番）で49歳の生涯を閉じました。

さいとうもぎち

## 齋藤茂吉居住の跡

所 南青山4-17-40

コース①

アララギ派の歌人として著名な齋藤茂吉（1882～1953）が約40年間住みました。山形県南村山郡金瓶村かなかめに生まれた茂吉（旧姓守谷）は、15歳の時に浅草で医院を開業する同郷の医師齋藤紀一の養子候補として上京し、25歳の時にこの地に移り住みます。東京帝国大学医科大学を卒業し、大正3年（1914）に紀一の長女輝子と結婚し齋藤家の婿養子となります。その後、長崎医学専門学校教授、ドイツ・オーストリア留学、青山脳病院長などを勤めながら歌人としての足跡を残しました。茂吉はこの地に移り住む前年に伊藤左千夫の門下となり、雑誌『アララギ』に短歌を寄せ、与謝野鉄幹、北原白秋、石川啄木、上田敏、佐佐木信綱、島木赤彦らと交流を深めました。昭和20年（1945）4月に郷里に疎開し、この地を去りました。現在居住の跡に茂吉自筆の歌を刻んだ碑が建っています。



きたもりお

## 北杜夫生誕の地跡

所 南青山4-17-40

コース①

小説家北杜夫（本名齋藤宗吉、1927～2011）は昭和2年（1927）5月1日、父齋藤茂吉、母輝子の次男としてこの世に生を受けました。父茂吉は精神科医でもありアララギ派の著名な歌人でもありました。地元の青南小学校を卒業し、麻布中学校などを経て、旧制松本高等学校理科乙類（信州大学文理学部の前身）で青春を過ごしました。ここで体験が『どくとるマンボウ青春記』のもとになっています。東北大学医学部卒業後は精神科医として勤務しながら執筆活動を続けます。昭和35年（1960）に『夜と霧の隅で』で第43回芥川龍之介賞を受賞し、これ以降、『どくとるマンボウ』シリーズなどのエッセイや小説、児童文学など幅広い分野で活躍しました。

し がおや

## 志賀直哉居住の跡

所 六本木4-3-13

コース②

白樺派を代表する小説家の1人志賀直哉（1883～1971）は14歳から29歳までの16年間をここで過ごしました。直哉の家は裕福で、明治30年（1897）に家族とともに移り住んだこの屋敷も1,682坪の広大な屋敷でした。直哉は学習院初等科、中等科、高等科を経て、東京帝国大学文学部英文学科に入学します。明治41年（1908）ごろ、それまで師事した内村鑑三のもとを去り、国文学科に転じた後に大学を中退しました。同じく明治41年（1908）に処女作となる『或る朝』を発表し、2年後に雑誌『白樺』を創刊しました。この後も『網走まで』などの作品を発表し、大正元年（1912）『大津順吉』『正義派』を発表した後、父との不和が原因で東京を離れ広島県尾道市に移り、ここでの生活に終止符が打たれます。当時の屋敷は昭和20年（1945）3月10日の東京大空襲で焼失しました。



くぼたまんたろう

久保田万太郎終焉の地跡

所 赤坂2-18~2/3

ここは俳人・小説家・劇作家の久保田万太郎（1889～1963）が死去するまで住んだ地です。万太郎は浅草に生まれ、慶應義塾大学で三田文学に参加します。明治44年（1911）に小説「朝顔」、戯曲「遊戯」を『三田文学』に発表し、これが新聞の時評で絶賛され、一躍脚光を浴びます。また、同じころ小山内薫<sup>おさないかおる</sup>に師事し、劇作家として多くの作品を発表します。万太郎は下町情緒と古典落語を愛し、伝統的な江戸言葉を駆使して滅びゆく下町の人情を描き、俳句だけでなく、小説や劇作など幅広い創作活動を行った文人です。戦後は、創作活動のかたわら、慶應義塾評議員、日本放送協会理事、文化財保護専門審議会委員、日本演劇協会会長などを務め、昭和31年（1956）には日本文芸家協会の文学代表として中華人民共和国を訪れました。昭和36年（1961）5月6日、慶応病院で死去しました。

ながいかふう

へんぎかん

永井荷風旧居「偏奇館」跡

所 六本木1-6

コース③

小説家永井荷風（本名壮吉、1879～1959）が大正9年（1920）から25年ほど住んでいました。荷風は若いころより江戸時代の文芸に親しみ、落語家入門したり狂言作者（歌舞伎の脚本家）を目指した時期もありました。父の命によりアメリカやフランスに留学し、フランス文学にも深い造詣を持ちましたが、失われつつある江戸時代の情緒と美を自らの作品に込めました。荷風は父から相続した土地を売却した後、築地などに住みましたが、ここが生涯の中でもっとも長く住んだ場所です。荷風は木造洋風2階建ての住居を新築し「偏奇館」と名付けました。この名前は外装の「ペンキ」に自らの性癖「偏奇」をかけたことに由来するそうです。荷風はこの地で創作活動に打ち込み、『墨東綺譚』など多くの名作を生み出しました。偏奇館は昭和20年（1945）3月10日の東京大空襲で焼失しました。

区指



しまぎきとうそん

## 島崎藤村旧宅跡

所 麻布台3-4-17

コース4

大正7年(1918)10月から昭和11年(1936)7月まで、小説家島崎藤村(本名春樹、1872~1943)が住んでいました(旧町名、麻布区飯倉片町33番地)。藤村はこの地で円熟した創作活動を続け、最後の長編小説『夜明け前』を完成させました。また、藤村の作品『飯倉附近』は、「フランスの旅から帰った当時、しばらく高輪二本榎に暮らした」という書き出しではじまり、大正時代から昭和初期にかけての飯倉町界隈の様子がいきいきと描かれています。藤村は明治学院(→61ページ)で英語を学び、そこでの自由で華やかな気風が彼の作品に大きな影響を与えたといわれています。また、明治学院大学の校歌は藤村の作詞によるものです。



おぎきこうよう

## 尾崎紅葉生誕の地跡

所 芝大門2-7

コース5

小説『金色夜叉』などの作者として知られる尾崎紅葉(本名徳太郎、1867~1903)は、慶応3年(1867)12月16日、芝中門前2丁目25番地の首尾稲荷神社そばの家で、牙彫り師尾崎谷斎の長男としてこの世に生を受けました。明治18年(1885)17歳の時に日本初の文芸団体「硯友社」を結成し、機関紙『我楽多文庫』を発行して注目を浴びます。19歳の夏に増上寺境内の紅葉山から「紅葉」と号しました。その後、幸田露伴とともに明治期の文壇の重鎮となり、「紅露時代」を築きます。門下生には泉鏡花、田山花袋、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋声など優れた人材を輩出しました。紅葉は小説集『芝肴』、短編集『男心は増上寺』など芝界隈を題材にした作品や、芝神明前榮太樓の銘菓「江の嶋」最中の銘を選ぶなど、終生、出身地の気風を大事にした人でした。

区指





慶應義塾大学は日本を代表する私立大学の1つです。その起源は安政5年（1858）、中津藩の藩士福澤諭吉が藩命により築地鉄砲洲（現中央区明石町）の中屋敷内に蘭学塾を開いたことにはじまります。その後、慶応4年（1868）に芝新銭座に移転し、年号をとって塾名を「慶應義塾」と決めました（→50ページ）。そして明治4年（1871）に現在地の島原藩中屋敷跡地を貸与され、ここに移りました（翌年に払い下げを受けます）。福澤は「独立自尊」「気品の泉源」「知徳の模範」「社中協力」「自我作古（我より古を作す）」「半学半教」などの精神をもって社会の先導者にふさわしい人格形成を志しました。



また、慶應義塾大学は耽美派やシュルレアリスムの作家・詩人を多数輩出した三田文学の総本山としても知られます。明治43年（1910）5月、教員の上田敏を顧問に、永井荷風を編集主幹にすえて雑誌『三田文学』を創刊しました。創刊当初から森鷗外や芥川龍之介らに発表の場を提供する一方で、慶応出身者の久保田万太郎、水上瀧太郎、佐藤春夫、石坂洋次郎らを育てました。また、昭和初期にプロレタリア文学が盛になると、西脇順三郎がシュルレアリスム運動を主導し、耽美派の牙城として広く知られました。

構内には慶應義塾図書館（写真左）、慶應義塾三田演説館（写真右）（いずれも国重要文化財）など貴重な文化財が残されています。



## 明治学院大学

所 白金台1-2-3/7

コース7

明治学院大学は日本最古のキリスト教主義学校（ミッションスクール）です。文久3年（1863）に宣教師ヘボンが横浜に開いたヘボン塾を起源とします。明治13年（1880）に築地へ移転し「築地大学校」と改称、同16年（1883）には横浜の先志学校を併合して「一致英和学校」とし、同19年（1886）に一致英和学校・英和予備校・東京一致神学校を合併して「明治学院」を設立し、翌年正式に認可されました。この時にキャンパスを白金台に決めました。昭和24年（1949）、新制大学設置の認可を受けて現在の明治学院大学が発足しました。

構内には明治学院インブリー館（国重要文化財）、明治学院記念館、明治学院礼拝堂（以上、区指定文化財）などの貴重な建造物があります。また、明治学院歴史資料館もあります。

明治学院歴史資料館

時 間：9：00～16：00

休 館 日：土、日、祝日、その他

料 金：無料

問い合わせ：03-5421-5170



いわやぎざなみ

## 巖谷小波宅跡

所 高輪4-1-18

コース8

巖谷小波（本名季雄、1870～1933）は明治政府の高官（のちに貴族院議員）で書家の巖谷一六の子として明治3年（1870）に麹町平河町で生まれました。周囲の反対を押し切り、文学を志して明治22年（1889）に尾崎紅葉らの硯友社に参加します。同24年（1891）に『こがね丸』を発表して創作童話の創始者となりました。翌25年（1892）に雑誌『少年界』、同28年（1895）に『少年世界』を創刊し、その後も『幼年世界』『少女世界』『幼年画報』などを主宰し、童話の創作活動や世界各国の童話の紹介を意欲的に行い、児童文学の普及に力を尽くしました。有名な『桃太郎』や『花咲爺』などの説話を再生し、世に送り出したのも小波の業績です。まさに児童文学の開拓者といえるでしょう。この地は明治40年（1907）に購入し、後に改築しました。昭和8年（1933）63歳で死去しました。[国] 区

